

若石と同志たちへ

昭和二十年代にコミンテルンの指令に基づいて、日本共産党が武闘革命で火焰ビン戦術を展開したとき、一方の旗頭たる志賀義雄（のちに宮本顕治と争いソ連派に走る）はこう言ったそうです。

「なにも武闘革命などする必要はない。共産党が作った教科書で、社会主義革命を信奉する日教組の教師が、みっちり反日教育をほどこせば、三〇四十年後にはその青少年が日本の支配者となり指導者となる。教育で共産革命は達成できる。」

まさに志賀の予言通りです。いま政界の中核にある人々は、終戦時は幼児か小学生でした。従って日教組教育と東京裁判史観の中にどっぷり漬かったまま育ってきた人々であります。その言動からみて、謝罪を叫ぶ人々は日本および世界の歴史について、どこまで勉強しているか甚だ疑問です。要するに勉強不足なのです。だから、「先の大戦は侵略戦争でアジア諸国民に耐え難い苦難と悲しみを与えた。陳謝して反省の意を示す以外にない。」こうした自虐的・単細胞的歴史観に育てられてしまったのです。細川元首相の侵略戦争発言が七〇八十%もの支持率を得たということは、そうした戦後教育がいかに浸透しているかという証左であります。

この戦後の自虐的な、社会主義革命を綱領にかかげる日教組教育の成果は、青少年の意識調査の中にもはっきり現れています。

近年発表された総務庁青少年対策本部の統計によると、日本、米国、台湾の高校生の意識調査で、次の様な数字が出ています。（平成六年五月調査）

- 一、今を楽しむ享樂性志向では、日本がトップで五三%、米三五%、台二三%。
- 二、将来に備えて勉強する意欲がない。日本はトップで四七%、米一五%、台一七%。
- 三、自分の将来はダメだと思っている。日本はほぼ四人に一人の二三%、米は三%、台七%。

次は平成五年十二月の調査で、日、米、英、仏、独、ロシア、タイ、韓国、フィリピン、ブラジル、スウェーデンの十一カ国の十八才から二十四才までの青年の意識調査です。

一、自国のために役立つようなことをしたいと思うか。日本は五十八%でビリから二番目、トップのフィリピン

やタイでは九十六〜九十七%が自国のために役立ちたいと思っています。

二、そのためには自分自身を犠牲にしてもよい。日本はビリで僅かに一一%、トップはタイとフィリピンの九〇%。台、米、韓、ブラジル等はみな八〇%台です。

日本の青年には国防観念や犠牲的精神などはほとんど絶無に近いといつてよいでしょう。

いまの日本のありさまは、ローマやギリシャの滅亡の時と似ていると指摘する人がいます。

①グルメばかりで飽衣飽食を際限なく追求する。②三K(汚い、危険、きつい)仕事を嫌い享楽志向だ。③徴兵を拒否し、奴隸や外人に国防をゆだねた。④エロと麻薬におぼれ教育は荒廃した。⑤人民は限りなく権利のみを主張して義務を怠った。⑥そして最後に政治の紊乱(びんらん)である。

今日の日本を鏡に映したようなものです。

日本テレビが過日、「麻薬」の特集をしていました。それによると、麻薬は十代・二十代の少年少女の間に爆発的に流行しはじめていて、性的遊戯やレイプに用いられ、しかも驚くべきことに、それら少年少女らには全くといっていいほど罪の意識はなく、しかも中高生の中に懐妊しているものさえかなり居るのであります。かつて大宅壮一氏は、テレビが流行しはじめたころ「一億総白痴化」という名句を遺しました。七つのチャンネルのどこをひねっても、出てくる場面は歌謡曲か、野球か蹴球・ゴルフなどのスポーツ、あとはくだらぬクイズ番組かセックスもの。かねて「民族衰亡の三S政策」といわれた「スクリーン・スポーツ・セックス」の氾濫です。このため青少年は活字離れとなり、思考力・思索力は奪われ、そのうえ反日キャスターの不真面目な時事解説です。まさに大宅壮一氏の「一億総白痴化」の到来であります。

教育の荒廢に伴って青少年の非行は増加の一途にあり、「神戸の少年殺人」や「女子高生のセメント詰め」等目をそむけ、耳をふさぎたくなる凶悪事件や粗暴事件が増えています。五十日以上登校拒否は、小・中・高合わせて実に十万人の万台を越したといわれています。

社・共両党を先頭に日教組・全教・連合など総合唱で「子供の権利条約」の批准を政府に迫り、署名運動など盛んに行つて、日教組や全教は子供を煽動し、子供を先頭におしたてて「日の丸」「君が代」の拒否運動を展開しました。その他、校則等の規律の廢止、内申書や職員会議の公表、中高生のセックス自由放任等、教育の荒廢

紊乱は手もつけられない状態であります。

恩師下中弥三郎先生は、敗戦のとき私どもにこう言われました。「日本は戦争に敗れた、しかし教育さえしっかりしていれば必ず国は興る。国が亡びる時は教育が亡びる時だ。」と。今まさに日本の教育は国を亡ぼしつつあるのです。

我々の祖国日本は、五十余年前の大東亞戦争に敗れて、異民族の支配下という、建国以来の未曾有の状況下におかれました。軍備も交戦権も持つてはいけないという国家主権否定の憲法を押しつけられ、教育基本法も制定されました。神道指令で、戦争の名称も、建国の精神も神話も廃絶され、歴史教育は墨ヌリで改定され、道徳教育や教育勅語は廃止となりました。その上、二年半の国際軍事裁判で「日本は極悪非道の侵略国家・犯罪国家である」として、指導者二十五人を処断（うち七人を処刑）されました。

当時GHQは三十項目にわたり厳しい言論統制を行い、日本国民の耳と口を封じてしまいました。そればかりではなく、BC級戦犯と称してろくな裁判もせず、五千余人を投獄して、千六十八人を絞首刑または銃殺刑に処したのです。さらに戦争に協力したと称して、実に田舎の村長から青年団長にいたるまで、気骨ある人物二十一人を公職から追放（パージ）しました。

こうした進駐軍の日本人としての「魂」文化と伝統」を破壊することに協力したのが共産党と社会党（今の社民党）とそのシンパです。

昭和二十一年に日本教職員組合（日教組）が発足しましたが、GHQの後ろ楯もあって、その勢力は急速に拡大しました。

この日教組が、国旗「日の丸」・国歌「君が代」の反対をはじめ、政府の文教政策にことごとく反対し、そのたびにストライキをぶちあげました。児童、生徒をすっぱらかして、先生たちが赤旗を振ってストライキを繰返すさまは、当時の年中行事とさえなりました。

日教組の目的を示した「倫理綱領」によると、「教師は労働者である」と規定して、マルクス革命の担い手であることを自負し、教育の目的は、「革命を担う青少年の育成にある」といった内容です。彼らの支持政党は日本社会党と日本共産党であり、逆にいえばこの二つの政党が、日教組を指導し、煽動してきたのであります。

今の四十代から六十代の政治家・官僚・マスコミの幹部等はみな青少年期に、日教組教育を存分に刷り込まれて育った階層です。

戦後日本の文教をダメにしてしまったのは日教組なのです。ソ連の崩壊、冷戦の終結など国際情勢の変化もあり、今日では日教組も二つに分裂し、その組織率も三三・七%（日教組）と九・八%（全教）に下降しましたが合わせれば四三・五%、まだ半数に近いのです。最近文部省にスリ寄っているが、彼らは「倫理綱領」も変えておらず、過去の反省もしていません。

加えて、ソ連崩壊後の社会主義者、あるいは左翼陣営のインテリは、反日主義に銚先を転じ、どこの国の教科書かと思われるほどの、日本に対する悪意というよりむしろ敵意をもった誹謗の教科書の編集に専念しました。

藤岡信勝氏と西尾幹二氏の両教授は『国民の油断』（PHP研究所）という共著を出しています。その中で両教授は、約半世紀におよぶ教育の荒廃に加えて、あたらしく使用される中学校の教科書七社全部に、かくの如き悪意に満ちた反日教科書が出現するとは、「国民の油断」であったと嘆かれています。

六年八カ月の長期にわたり日本を支配した占領軍は去って日本は独立を回復しました。独立と同時にドイツも韓国もインドも；その他の諸国は、自国の憲法を創設して、主権国家としてのアイデンティティを確立しました。だが日本にはその時すでに気概も覇気もなくなっていたのです。ただ経済回復のみに専念している間に国家意識が国家に対する忠誠心も愛国心もなくなっていました。

代わって「戦後民主主義」と称する利己主義や享楽主義が横溢し、いじめや、いじめによる自殺、青少年の凶悪犯罪や小中学校不登校生の激増が大きな社会問題となっています。

私のいいたいのは、このような国家意識も国家目標もない、自国に対する誇りも希望ももてない、国旗・国歌さえ教えない荒廃した反日教育；こうした民族の衰退の時に起きたのが、神戸の少年Aの小学生殺人事件であり、オウム真理教の大量殺害事件であり、かつての赤軍派の多数の同志虐殺事件であるという推論であります。

以上の如く、権力抗争と汚職にまみれた、しかも国を亡ぼす謝罪外交にあけくれる見識なき政治。反日的売国的なマスコミの横行。教科書の自虐的記述と社会主義革命を目指す日教組教育。国家観念を喪失してしまった享楽志向の、麻薬とセックスにうつつをぬかす青少年。そして少子化とますますの高齢化がすすむ社会；日本は危

ない！このままでは日本は亡びる。私はそうした危機感と憂慮に心を痛めています。その病根は、戦後五十余年いまだに拭いきれない東京裁判史観の呪縛にあるのです。若き同志の皆さん、次のことを決して忘れないで下さい。大東亜戦争がおこるまでは、人種は平等ではなかったのです。

……いわゆるアパルト・ヘイト、一緒に食事も出来なければ、一緒に学ぶことも出来なければ、寝食共にすることも出来なかったのです。タイのククリット・プラモード首相は、次のように言われました。

「——我々が、白人と肩を並べて語れるようになったのは、誰のお陰か。」

大東亜戦争があったからではないのか——。」

皆さん、アジア諸国は日本が敗戦してわずか五年の間に、インド、セイロンを含む東南アジア全部が独立をいたしました。大東亜戦争以前と今日とを比べると、実に一一六カ国、二十二億千二百万人の民族が独立したのであります。

……我々日本人は、この二十二億千二百万人の有色民族の同胞と手をとって、これからのアジアを、そして世界の平和を築いて行く道ではありませんか。

日本民族よ目覚めよ！ 同胞よ奮起せよ！ そう願わずにはいられない……。

【終】